



テーブル連続小説
ラブ☆プリンス
第8話・姫と4人の王子

私はどこにでもいる普通の女子大生。強いて他の子と違うところをあげるとすれば、車に興味があるってことかな。ひよんなことから、私はとある4人組からある決断を迫られていた。

「アーン、冬道が不安だと？北海道シエナナはパーワンの俺様に任せな。よし悪しを判断するには実力は当然のこと、知名度、実績、そこが大切だ。アクティブ発泡ゴムのグリップ力に酔いな！」

人気ナンパーワンの彼。堂々とした振る舞いを納得させる知名度だけじゃなく、実力もナンパーワンにふさわしいという。

「ブランド力で車が止まれば良いですが。パールン吸水、密着ゲル、そして俺だけの鬼グルミ……任せて損はありませんよ」

唯一無二の特殊な技術を持ち、経済的な彼も決して負けていない。

「ちよい待ち。スタッドレスタイヤに必要なものは知名度や小細工とちゃう。大事なのはしなやかなゴムと経済性、この二つが基本に忠実な無駄のないタイヤかどうかや」

効きもち、長寿命、ぎゅっと止まる感覚。これが無駄のないスタッドレスタイヤということなのか。

「まだまだだね」

「お、お前は！」

「Y社！」

「氷で止まれる機構とか長持ちするとか、それってスタッドレスタイヤとして当たり前だと思うけど？」

最後に現れた彼は、クールでニヒルな佇まいのまま私の手をとった。氷に効く機能性、長く効く経済性、広く利用される実績、その他に大切なことなんて……。

「……もしかして、低燃費性能も兼ね備えているって……」

私たちをこんなに驚かせても動じずに、真っ直ぐな瞳で冬の路面を見つめてる。揺れ動く私の心なんて関係ないみたいだ。

「さっさと俺と契約すればいいんです」

「俺やったらさっさと君の車を守ってみせるで」

「何を迷ってやがる。俺様と契約しな」

「別にどれでも良いんじゃない？俺を選んでくれたら、うれしいけど」

4社4様に素敵なんだから、私は一人波乱万丈。全員を選ぶことはできないし、一体どうすればいいの？悩める私は、タイヤのプロフェッショナル・中川氏が来店し丁寧に説明してくれる北海道三菱小樽店へ向かった。私と冬を過ごしてくれる、タイヤという名の王子様を探し……。

つづく

桃、栗、3年。柿、8年。
タイヤの寿命は、あと何年。

北海道三菱の
タイヤフェア
10月7日～8日・14日～15日
開催中